

地球 第十六卷 第四號

昭和六年十月

三重茶の經濟地理學的研究

津 田 秀 郎

緒 言

茶は砂糖・煙草などと共に嗜好料原料として重要な農産物である。何れも熱帯、溫帯に適する植物であつて、うちでも茶樹のみは多年生の灌木で五十年、八十年長きは二百年以上の長期間に亙つて摘葉することが出來、古來製茶業は農家の副業として氣溫の高い雨の多い排水良好な地方に行はれてゐる。我が國にあつては明治維新以前の經濟單位の小域に限定されてゐた時代には製茶業はその一地方の需要を充たすに止つてゐたが、維新以來交通機關の發達と、外國との通商貿易が開かれるに及んで經濟區域は急に擴大され、國內はもとより米國・カナダにまで輸出されるやうになり、斯業は俄に隆盛に赴き從來茶といへば宇治茶に限られてゐた感があつたが、三重・靜岡に於ける發達は目覺しく遙かに宇治茶を凌駕するに至つた。今や貿易農産物として主要な地位を占めてゐる。

三重縣に於ける茶業發達の階梯

茶が三重縣に移植されたのは何時の頃か確かでない。我が國に初めて移植されたのは、後鳥羽天皇の御代である。その頃（文治三年四月）僧榮西は宋に留學し建久二年歸國に際し、支那江南の地から茶の種子を携へ來り、これを筑前國春振山に播種した。當時高辨は榮西から種子を譲り受け、伊賀の入島、伊勢の川上その他に播種した。これが三重縣に移植された始めである。

八島は服部川上流服部一帯の地、川上は櫛田川の上流、今の一志郡川上及び彼南郡川俣村附近である。

かくして茶樹は栽培されるやうになつたが、初期にあつては主として藥用に利用され、一般化するまでには至らなかつた。その後延享年間に栽培法並びに製法は改善せられ、大いに隆昌に赴いたけれども、その供給はおもに伊勢一國に限られてゐた。安政六年横濱の開港以來綠茶の米國・カナダ進出と共に急に發達し、爾來幾多の變遷を経て今日に至つた。

栽培面積

栽培面積は年により多少の増減は免れないが、近年は一般に漸減の傾向を辿つてゐる。こは我が國の一般的傾向であつて、一つに農家經濟の如何に基因するものと解せられる。三重縣に於ても同じく減少しつゝある。

全國並びに三重縣に於ける茶畑増減を左に掲げる。（第一表）

本表によるに、三重縣に於ける茶畑の増減は、明治三十一年から同三十五年に至る五ヶ年の平均は三、三八四町歩であつたが、二十年後の大正十二年から昭和二年に至る五ヶ年の平均面積は約半減して一、八六五町歩となつた。その後も尙ほ減少しつゝある。こは如何なる原因に基くものであ

く同年間に四百五十二町歩、年平均減少四十町歩に達しその率の大なるに驚く次第である。かく一般的傾向として分積的、集積的地域も減少しつつあることは、經濟上の事情に基くとはいふものゝ寒心すべき現象である。ここに於てか縣當局者は僅かなながらも茶園の新設に對し(昭和四年度から)奨励金を交附することとなつたから、今後は多少なりとも漸増することであらう。

昭和四年九月一日の第一回農業調査報告による時は、昭和三、四、五年の縣當局の調査に比し茶畑の面積の差があまり大きに驚かざるを得ない。農業調査報告は最も正確であり、信すべきものであるが、調査に當り畦畔などの分積的のもの、或は混合耕作地などが他に編入された結果により、かく差が出來たものと思ふ。縣當局の調査といへども調査法の幼稚、調査訓練の足りないために基づく誤差として考察する時にも、その大體の傾向を知ることが出来る。本篇は主として縣當局の調査になつた統計によつて論を進めたいと思ふ。

昭和四年九月一日の農業調査の結果によると、三重縣に於ける耕地面積は次のやうである。

全 耕 地 一〇四、三六八・六町
 畑 地 三三、三八一・一
 茶 畑 九三七・六 (自作地 七九四・三町、小作地 一四三・四町)

茶畑は全耕地の僅か〇・八九%、畑地に對しては二・八八%に過ぎない。

かく茶畑の激減したのは勞力問題、品質の向上問題に關係してゐることは既述のやうである。これに反し農業經濟上有利なため明治初年より急に増加したものに桑畑がある。茶樹の栽培に適する洪積層の臺地、段丘は同じく桑樹の栽培に適し、蠶の飼育にも最も適した地であるから、繭價の騰貴、養蠶業の發達と共に同じく製産者の立場にある農家では、製茶業よりも一層有利な養蠶業に轉ずるものが族出するに至り茶畑は轉じて桑畑化したものが少くない。特に山間地にあつては甚だし

い。また都市に接近する地域では蔬菜園藝などの採算上有利なものに、また都市の發達膨脹のため住宅地に化したものもあるであらう。

最近十年間に於ける茶畑・桑畑の増減を示すと第三表の様である。

第三表

	桑畑	茶畑
大正8年	13,454.0	2,331.9
9	13,819.1	2,231.8
10	13,676.2	2,185.3
11	13,720.4	2,022.3
12	13,928.0	1,971.9
13	14,363.7	1,917.4
14	15,696.2	1,936.9
昭和元年	16,308.1	1,783.3
2	16,917.0	1,714.9
3	17,783.7	1,707.0

桑畑の増加は最近十年間に一三、四五四町歩から一七、七三四町歩に約四、四〇〇町歩増加した。桑畑の増加は一つに繭價の騰貴に基因するもので、茶畑のみならず洪積臺地上の水田（乾田）の桑畑に化したものが少くない（鈴鹿郡深伊澤村近傍など）しかし昨年来の繭價の暴落に伴つて急激に桑畑は他作物用に更新され始めたから、今後二、三年中には著しき變化を見ることであらう。

茶の産額

茶樹の栽培面積は前述の如く明治初年から減少の傾向を辿つてゐるが、これに反しその産額は漸次激増しつゝある。特に世界大戰當時の大正四年から大正八年前後にかけてはその産出最も夥しかった。

明治三十一年から最近に至る産出額を示すと第四表のやうである。（單位千貫）

即ち本表にて明かなる如く明治三十一年より三十五年に至る平均年産額は四十五萬七千貫に過ぎなかつたけれども、漸次産額を増加し二十五年後の大正六年には八十萬貫を突破し、黄金時代を出

第四表

明治31—35年平均	457千貫
36—40年平均	542
41—45年平均	620
大正1—5年平均	600
6	601
7	760
8	812
9	828
10	795
11	750
12	640
13	568
14	569
昭和1	548
2	513
3	540
4	493
5	421
	491
	463
	475

昭和五年にはほぼ明治三十一年頃と同産額を示すに至つた。

栽培面積と製茶産額との關係を見るに、その増減關係は互に反比してゐる。面積がかくも激減したのに産額が急激に増加したのは一つに栽培面積の合理化、他に技術の改善、進歩、及び經濟單位の擴大にあつた。明治以前の農業經濟の單位は主として伊勢一地方に限られ、栽培法の合理化、技術の改良、進歩は殆ど顧みられなかつたが、維新後經濟單位が交通機關の發達と共に一地方から脱却して全國化し、且つ外國貿易の開かれると共に茶の需要は一躍して一地方より、全國的、世界的となり、その經濟區域の擴大と共に製茶業は國內的産業から對外的産業となり、斯業の改善は大いに世人の注目する所となつた。

こゝに於て先づ第一に叫れたのは茶園の改良合理化にあつた。茶園に集約的のものと分積的のものと二種あることは既述の如くで、分積的のものは漸次改廢せられ、集約的のものに全力を注ぐや

現するに至つた。こは一つに世界大戰に伴ふ物價の騰貴に左右されたものであつて、戦後に於ける物價の下落につれ農家經濟上あまり有利ならざる製茶業は栽培面積の減少と共にその産額は漸減するに至り、昭和年間に至つては終に四十萬貫となり、

うになつた。集約的のものでも經濟上有利な桑園に化したものが少くなかつた。かく栽培面積は減少したけれども一方に於て製茶技術の進歩改良を促し多大の製産費を要する手揉製は勞働賃金の騰貴と多量製産の立場から漸次機械製茶となり、その生産額は急激に増加するやうになつた。

(現今なほ手揉製、半手揉製などが行はれてゐるが、産額に於ては機械製に比すべくもない。)

一町歩當りの産額 明治三十一年から一町歩當り産額を示すと次のやうである。

年	1町歩當り
明治31	135貫
32	170
33	209
34	206
35	227
36	237
37	310
38	328
39	268
40	328
41	321
42	287
43	260
44	281
45	276
46	277
47	237
48	263
49	225
50	239
51	311

第五表

年	平均
明治31-35	31
36-40	35
41-45	36
46-50	40
51-55	41
昭和1	2
2	3
3	4
4	5
5	6
6	7
7	8
8	9
9	10
10	11
11	12
12	13
13	14
昭和1	1
2	2
3	3
4	4
5	5

昭和

場合と然らざる場合とに於てその出芽量に非常な差がある。従つて製茶産額は施肥と不可分の關係にあるが、その施肥は農家經濟にとつては重大な影響を及すものであるから、世の需要に支配されるのは止むを得ない。従つて需要が増大すれば、自ら施肥も十分となり、一町歩當り産額は増大するであらう。

かくの如く一町歩當り製茶産額の

増加したのは茶園の改廢並びに合理化、技術の進歩によるがまた一方に於ては需要の激増、施肥の如何に負ふところが極めて大きい。即ち茶は多年生の植物でその出芽量は特に施肥と密接な關係にあるもので、同じ一町歩の茶園でも施肥宜しきを得た

この關係は世界大戰當時に最もよく窺はれる。日本全國の大正元年から大正七年に至る七年間の總産額に對する輸出割合は47—76%で、年平均52.7%、大正六年の如きは76.1%の多きに達したのであつた。かく對外需要の激増するにつれ、國內的より對外的を主とする三重縣にあつては大いにその影響を被り、産額もこれに左右されてゐる。即ち大正六年は八十二萬七千九百二十八貫、百四十二萬一千六百八十一圓、一町步當り三百二十八貫に上つた(第五表)。大正八年以後財界の不況に伴つて對外需要は激減し産額も漸減するに至つた。

茶の種類 本縣産は玉露・煎茶・紅茶・番茶の四種に大別される。煎茶は最も多く全産額の過半數の八割を占めてゐる。番茶・玉露これに次ぎ紅茶は僅か二十四貫に過ぎない。

昭和五年度に於ける産額

煎 茶		番 茶		玉 露		紅 茶		粉 茶		計	
數 量(貫)	價 額(圓)	數 量(貫)	價 額(圓)	數 量(貫)	價 額(圓)	數 量(貫)	價 額(圓)	數 量(貫)	價 額(圓)	數 量(貫)	價 額(圓)
5,912	1,316,400	9,025	104,741	6,455	55,410	3,440	1,450	400	1,450	4,667	4,667
5,165	84,250	11,424	10,860	3,333	3,821	240	100	—	—	4,756	4,756

備 考

右側は三重縣茶業組合聯合會議所調査

左側は昭和五年茶統計表(農林省統計課)

統計表に表はれてゐる産額は必ずしも正確ではない。縣廳の調査と茶業組合聯合會との調査とで各相異し後者の調査による時は數量の大きいのが普通である。また更に精細に調査すればもつと増加することは必然で少くとも

二割内外に及ぶであらう。しかしその調査がたとひ正確でないとしても、一般的傾向を察知することは出来やう。

製 造 戸 數

製造戸數は年により多少の消長は免れざるを得ない。しかし大正年間にあつては大した變動もなかつたけれども大正の末期からは漸増の傾向を示し、第六表にて明かなるが大正十四年から昭和元年にかけて一躍倍加し、九、六六三戸から二三、六〇九戸となり、爾來年々一千戸以上を増加しつゝある。栽培面積の急減に反し、製造戸數は僅か數年間に三倍

第七表 製造戸數

大正8年	9,307
9年	8,758
10年	8,952
11年	9,673
12年	9,683
13年	8,798
14年	9,663
昭和1年	23,609
2年	24,899
3年	26,796
4年	27,650
5年	28,112

以上増加してゐるが、産額はあまり變動を見ず寧ろ大正中期(表四)より減少してゐる。茶園の合理化、製法の合理化の叫ばれてゐる今日、小製造家の輩出するのは極めて變態的な現象である。

大正二年頃から縣の補助によつて叢生した各郡、各町村に於ける共同製茶組合は財界の變動に抗し得ず資金の缺乏、組合員の統制宜しきを得なかつたために脱退相續き、解散するもの次第に増加し、共同組合より個人經營化して小製造家が増加したものである。従つて大正八年には一戸數の生産額平均八十貫以上にも達したものが昭和五年には約五分の一の十七貫に激減した。また養蠶業不振のため今まで生芽發賣せしものが、製造家に立ち戻つたのも、原因の一部をなしてゐるのではあるまいか。

地 理 的 分 布

三重縣に於ける經濟區はほゞ行政區劃と一致してゐる。即ち伊勢・伊賀・志摩・紀伊の四經濟區に大別することが出来る。伊賀盆地は四周山に圍繞され、氣候、産物など自ら他地方と趣きを異にし志摩・紀伊は紀伊山脈の南斜面を占め太平洋に面し氣溫は高いが、背後に山を負ひ林産、水産に富んでゐる。伊勢十郡は伊勢平野と鈴鹿山麓の臺地または扇狀地、段丘等から成り、農産に富み商業も盛である。従つて政治的にも經濟的にも三重縣の主體をなし、その産業の盛衰は一に伊勢國の産業の如何によることが多し。

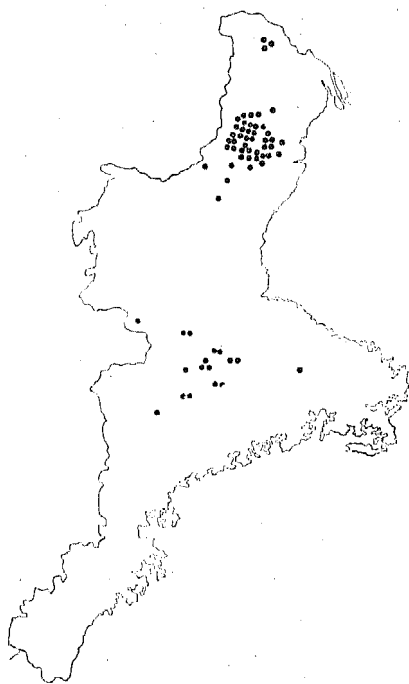
表 八 第

國名	郡 名	製造戸數	産額(貫)	價格(圓)	作付反別(町)	
伊 勢	北 勢	桑 名	189	5,561	14,007	19.3
		名 辨	990	32,107	102,104	177.4
		員 三	1,850	201,746	573,455	419.1
		鈴 鹿	608	58,769	153,752	262.4
	中 勢	河 藝	516	6,613	15,780	30.1
		阿 濃	845	1,898	4,782	7.4
勢	南 勢	一 志	1,718	21,104	83,177	112.2
		飯 南	1,394	35,046	121,414	177.7
		多 氣	1,607	34,025	126,137	144.9
		度 會	3,319	29,859	101,699	129.7
		合 計	13,036	476,728	1,296,307	1,480.2
伊 賀	阿 山	名 賀	1,349	14,435	56,811	52.6
		賀 賀	1,281	12,165	63,777	28.0
志 摩	志 摩	2,661	20,599	62,273	80.1	
紀 伊	北 牟 婁	1,326	2,193	5,927	10.6	
	南 牟 婁	7,143	15,019	26,955	54.6	
總 計		26,796	491,242	1,512,050	1,707.0	

製茶業も同じく主として伊勢國に限られ、その他の地方にあつては、産額は極めて微々たるものである。こは全く専ら氣候、地質等の自然的要素に恵まれてゐるからである。

昭和三年度に於ける製茶情況を示すと第八表のやうである。

第一圖



また農業調査の結果による茶畑
(十町歩以上の町村)の分布を示
すと第一圖のやうである。(黒點一
個は茶畑十町)

本圖にて明かなるが如く、伊勢
に於ける産地は北勢と南勢とに大
別される。

北勢區 員辨・三重・鈴鹿三郡
南勢區 一志・飯南・多氣・度會
四郡

これ等の中間に位する河勢・阿濃二郡は合せて茶畑僅か二十三町(昭和四年九月一日)に過ぎず、
北部の桑名郡も僅か三町である。何れもこれ等の地方は鈴鹿・阿濃または楯斐川の沖積平野から成
り、土地概して低く米田に適し經濟的立場より茶樹は殆ど作付けられない状態にある。

北勢の員辨・三重・鈴鹿三郡の大部は地質が茶樹に適し、背後の鈴鹿山脈は冬の寒風を防ぐ自然の
障壁となり、夏の濕氣を含んだ南風はこゝに衝突して多大の雨を降らすため氣温は高く雨は多く地
質が排水に適し茶樹の發育は極めて良好である。製茶業はこの三郡に最も盛で、その總産額は本縣

總産額の六割餘を占めてゐる。中でも三重郡は三重縣に於ける大宗で、産額、面積何れも一頭地を抜いてゐる。水澤村はその中心で茶畑は畑反別の五割二分(百二十町歩)を占め、年額十萬貫に近く三重郡總産額の四六・〇三%、三重縣の一九・七一%(何れも昭和三年)を占めてゐる。鈴鹿郡これに次ぎ、深伊澤・石薬師村はその中心である。兩郡共に移輸出を主とし、一戸當り前者では一〇九貫後者では九十六貫である。

南勢は飯南・多氣兩郡を中心とし、紀伊山脈中の縦谷の河成段丘上に、而も日照度の強い南斜面に多く栽培されてゐる。一志郡八幡村川上は本縣製茶の搖籃地で古くから栽培され、同郡大郎生・多氣村は品質の優良を以て聞えてゐる。飯南郡川俣・柿野・宮前・粥見の諸村は川俣茶の産地で栽培の歴史古く多氣郡は三瀬谷・萩原・領内村を主産とし良茶園に富んでゐる。

志摩郡は本縣製茶の早場で、三重郡の菰野町と共に僅か乍ら紅茶を産する。鶴方村はその中心で本郡産の四一・三八%を占めてゐる。

北牟婁・南牟婁兩郡は熊野灘に面し、氣溫高く雨は多いが、域内山地多く耕地面積少く住民は林業または水産業を生業とするものが多く、製茶の産額は少い。しかし製造戸數は極めて多い。これは手揉み茶が大部を占め、小生産家が多く各自の需要を充たす程度の小規模なものであるに基く。

伊賀盆地を占める名賀・阿山兩郡は氣溫稍々低く、特に南半の名賀郡は南境に山脈連互し日照度弱く阿山郡よりは氣溫も低く摘葉時期も後れ、産額も低率である。名張町はその中心、新居・丸桂村は阿山郡の中心で、何れもその製茶は京都・滋賀に大部分移出せられる。

摘葉時期と降霜との關係

三重縣は南北に細長くかつ北勢では西北境に鈴鹿山脈が連亘し、南勢では東西に紀伊山脈が連亘するため、各地風向・日照度・異り、雨量・氣温・降霜に多少の相異がある。かつ土壤も南北異り、降霜の時期にある影響を及ぼす。即ち北勢にあつては鈴鹿山脈に冬の季節風は遮ぎられ、夏の濕氣を含む季節風は南斜面に多くの雨を降らす。南勢では太平洋岸と宮川・櫛田川の縦谷とでやゝ氣候異り、太平洋岸の志摩・紀伊は最も暖く雨も多いが、縦谷はやゝ氣温も下り雨も少い。特にその北側と南側とで日照度を異にする。伊賀盆地は四周山に圍繞され盆地特有の氣候で氣温も亦低い。

茶樹は溫熱帶性の植物で氣温高く、雨量適度にあり、且つ排水の良好な地質を好むものであるからその發育、摘葉の時期は氣温に左右せられ例年同一ではなく多少相異するが常である。特に一番茶にあつてはその摘葉時期は降霜の最終日の如何による。茶芽は最終降霜後氣温の上昇に伴つて急に發育するもので降霜時期の如何は摘葉と重大な關係にある。同一地方でも土壤の如何により降霜時期は異なる。腐植土の如き太陽熱を吸收する率の大なる土質にあつては、然らざる土質のところよりは最終日は後れ勝ちである。かくの如き土質のところは局部的に夜間に於ける氣温の急降に際し降霜を見、思はざる不慮の災害を被ることがある。昭和三年に於ける氣候状態を次に示す。

この四月上旬から五月上旬にかけて摘取するものは一番茶と稱し品質は最もよく、且つ産額も多く年産額の約七乃至八割を占めてゐる。續いて七月上旬から再び新芽を摘葉する。これを二番茶と稱し、品質もやゝ下り澁味も一番茶より少い。所により採集しない所もあり、産額も僅か二割内外

表 九 第

地名	最多風向	平均気温	年雨量	雨天日数	降霜始	降霜終	摘葉開始
桑名	北	16.9°	1850	113	11月2日	4月24日	5月5日頃
楚原	西	16.8	2265	147	"	5月6日	
菰野	東	16.8	2039	176	"	4月24日	
龜山	北西	16.5	2243	170	"	"	5月3日頃
津	東	14.6	2082	149	" 23日	" 15日	
相可	東	17.4	2550	150	" 21日	5月6日	4月15日頃
相鳥	西	17.7	3125	162	12月5日	3月22日	
尾鷲	北東	15.1	5732	162	" 8日	"	4月10日頃
木本	北西	19.6	3150	149	" 7日	2月27日	
上野	西	16.0	1709	146	11月1日	5月6日	5月15日頃
名張	北東	16.0	1760	169	"	"	

地 球

第十六卷

第四號

三五

一四

である。この摘葉後茶樹の軸高を平等ならしめ、また新芽の發芽を容易ならしめるために、或る程度に前年からの古木・古葉を缺にて刈取る。この刈取りたるものを蒸して日射にて乾燥したものが番茶である。番茶は價額低廉で採集上有利ならざるため、勞働賃金の高い時または夏季に於ける天候如何によりその産額に著しい差がある。この番茶採集後は氣温の最も高い時期であるため、適度の降雨さへあれば茶芽の生長は極めて迅速で、八月上旬からはまた摘葉される。これが三番茶で色は最もよいが、滋味なくその産額は年産額の約一割に過ぎない。これは茶樹の保護上摘葉しない所が多いためである。

縣外移出狀態

本縣産は縣内の需要を充たしてなほ餘りあり、その過半は縣外は勿論、關東州遠くはカナダ、北米合衆國に輸出せられる。その額は年により一定しないが、年々總産額の六割以上に達し本縣に於ける主要産業の地位を失はない。

移出先は北海道、朝鮮、三府三十縣の多きに達し關東州

への輸出も少くない。昭和四年四月から五年三月末に至る一年間の移出額は三一〇、八三八貫で昭和四年總産額の六割七分強に當る。移出額の最大は京都府で總移出額の五割九分を占めてゐる。これは京都府の需要を充すのではなくて、宇治にて再製されて所謂宇治茶として縣外並に海外に輸出されるのである。愛知大阪の各府縣は京都府に次ぐ主要移出先で各二萬貫以上に達する。

第十表

貫	1,850	川山梨分城口鮮媛島島形計	310,838
	425	川山梨分城口鮮媛島島形計	307,130
	247	川山梨分城口鮮媛島島形計	2,930
	32	川山梨分城口鮮媛島島形計	778
	24	川山梨分城口鮮媛島島形計	3,708
	53	川山梨分城口鮮媛島島形計	
	416	川山梨分城口鮮媛島島形計	
	200	川山梨分城口鮮媛島島形計	
	510	川山梨分城口鮮媛島島形計	
	370	川山梨分城口鮮媛島島形計	
	1,034	川山梨分城口鮮媛島島形計	
	48	川山梨分城口鮮媛島島形計	
	8	川山梨分城口鮮媛島島形計	
	307,130	川山梨分城口鮮媛島島形計	
	2,930	川山梨分城口鮮媛島島形計	
	778	川山梨分城口鮮媛島島形計	
	3,708	川山梨分城口鮮媛島島形計	
	310,838	川山梨分城口鮮媛島島形計	

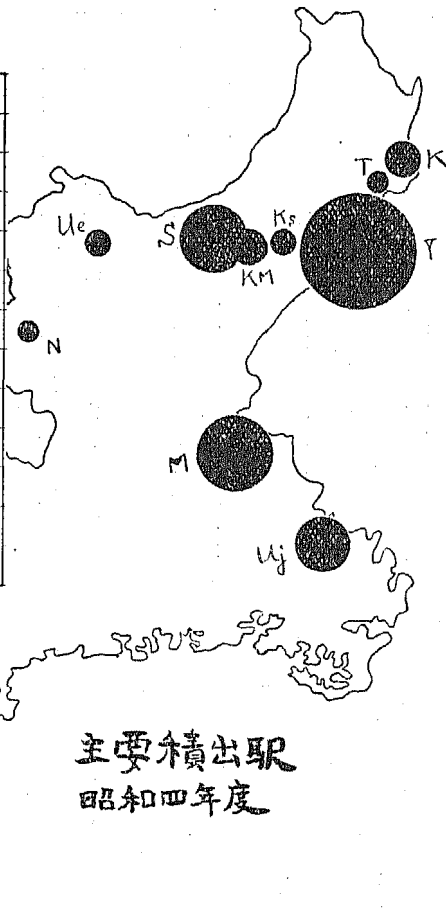
これら移出茶の取引地は交通の便利な鐵道沿線の主要驛であつて、多くは陸路鐵道便にて各地に送られる四千貫以上(昭和四年度)の積出地は桑名、富田、四日市、加佐登、龜山關、松阪、山田の各驛で、就中四日市驛の積出額は最大で十三萬貫を突破しその市場圏も最大で北海道を始め三府二十縣遠く關東州にまで及んでゐる。

桑名、多度兩驛にて集散せられる

製茶は主として桑名、員辨兩郡産のものである。多度は西境に養老山脈が延び來り、員辨郡との交通は妨げられ、員辨郡産のものは桑名驛に仕向けられ、多度より積出されるものは多度村並びに近傍

圖 二 第

品名	内地向	關東州
K 桑名	11,104	
T 富田	4,013	
Y 四日市	133,241	3,260
Ks 加佐登	5,571	
Km 龜山	11,048	
S 伊弉	44,383	
M 松阪	51,210	4,300
Uj 宇治山田	27,904	180
Ue 上野	4,643	
N 名張	3,898	
其他	5,440	
計	307,130	3,708



主要積出駅
昭和四年度

産のものに限られてゐる。員辨郡は東・西北境何れも山脈に圍繞され、東南の桑名に境する所のみは開け、鐵道及び幹線道路は何れも桑名町に通じ、本郡産の物資はすべて桑名町にて集散せられる。桑名郡の製茶産額は昭和三年に僅か五千餘貫なるに移出額の一萬貫

を突破するは後背地として員辨郡を控へるためである。目下建設中の三岐鐵道開通の曉は員辨郡產物資の幾分は富田、四日市に運ばれ、その供給範圍は擴大されるに至るであらう。北勢地方にあつては鈴鹿山脈の山嘴は多く西北から東南の方向をとり、河川の流路、交通路もこの方向のもの多くこれを横斷する道路には阪路少からず物資の輸送に少からざる妨害をなしてゐる。従つて二山嘴間即ち一溪谷の物資は西北から東南に走る交通路に沿つて積出地に運搬される。四日市市は三重郡の東部に位し關西線、四日市電鐵、伊勢電鐵、三重軌道等の諸鐵道、並びに主要道路が集中し三重郡產の物資の殆どすべてはこゝにて集散される。他面開港場であつて海外との取引も行はれ。市場圏は尤も大きい。鈴鹿郡產の製茶は陸路加佐登・龜山・關の各驛に集り、多く京都に移出せられる。南勢地方は紀伊山脈が東西に走り、主要交通路は何れも縦谷に沿ひ、各溪谷間の物資は雲出・櫛田・宮川の縦谷に沿うて河口近くに運ばれる。飯南郡產の製茶は櫛田川に沿うて和歌山街道によつて多く松阪に運ばれ、多氣郡產(宮川上流地方)は紀勢鐵道の開設と共に相可驛に送られる。宇治山田驛は主として多氣郡產を、佐奈具・上野の各驛は阿山郡產を、名張は名賀郡產を集散してゐる。大軌鐵道の開通のため南勢・伊賀地方の移出状態は大いに變化するであらう。

我が國に於ける地位

我が國では氣溫の低い青森以北を除いた各府縣に多少づつ産出するが、内地では静岡・三重・京都・鹿兒島・奈良の各府縣はその主要産地である。

昭和五年度に於ける三重縣の茶業状態を内地全國のに比較すると次の様である。

第十表

製造戸數	栽培面積	産額	價額
内 地			
一、一二〇、二四〇戸	三八、〇八七・五町	一〇、三〇五、八四〇貫	二四、一九八、一三五圓
三 重 縣			
二八、一一二戸	一、五二八・六町	四七五、三四六貫	一、〇二八、一三二圓
順位			
二〇			五
三			二
二			一

本表による時は製造戸數に於て第一位の鹿兒島(一一二、八五四)、第二位の廣島(七七、四七二)より遙か下つて第二十位、栽培面積は静岡(一五、三三〇町)鹿兒島(二、九六七・五町)に次ぎ第三位、生産額は静岡(五、二六八、五八七貫)に次ぎ第二位にあり、内地總産額の5%を占めてゐる。製造戸數、面積に比較する時は、その産額決して少くなく全國に於ける主要供給地たる地位を失はない。しかしその價額の第五位にあるは寒心すべき現象である。これは機械製茶の激増、また一方に於て茶園の老齡、財界の不況に伴ふ農家經濟の關係から施肥宜しきを得ないため、品質の低下を招來したものと考へられる。品質の向上こそ將來三重茶の最も留意すべき點である。

終りに臨み資料を惠與されし農務局古谷學士、三重縣茶業聯合組合に深く感謝する。

文 獻

- 大杉繁、鹽谷惣次共著 宇治地方荒廢茶園土壤の改良に關する研究 農學研究 第十三卷
- 内川寛一 地理教育 十二卷五號(昭和五年) 第五次、第六次農林省統計(農林省) 三重の茶業(三重縣茶業組合)
- 茶業通信 第十五號(三重縣、六年一月) 統計之友 第二號(三重縣) 昭和三年三重縣統計書 第二篇 三重縣
- 工業農産物要覽(農林省農務局) 農業調査結果報告(内閣統計局) 茶業要覽 農務局第三十七號(農林省)